



黒く光る鏡、アーカイヴという鏡 書評 Mirror  
Reflecting Darkly: Rita Keegan Archive ( London:  
Goldsmiths Press, 2021)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊本, 理抄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00017694">https://doi.org/10.24729/00017694</a>

# 黒く光る鏡、アーカイヴという鏡

書評 *Mirror Reflecting Darkly: Rita Keegan Archive* (London: Goldsmiths Press, 2021)

熊 本 理 抄

大阪府立大学人文学会 人文学論集 抜刷

第40集 (2022年3月)

## 黒く光る鏡、アーカイヴという鏡

書評 *Mirror Reflecting Darkly: Rita Keegan Archive* (London: Goldsmiths Press, 2021)

熊 本 理 抄

本書の主題 *Mirror Reflecting Darkly* は展覧会のタイトルから採用されている。1980年代後半に、ブラック女性アーティスト集団がBrixton Art Galleryで開催した展覧会だ。30年以上の時を経た2020年2月からの1年間には、本書副題を冠した展覧会 *Rita Keegan Archive (Project)* がSouth London Galleryで開かれ、パンデミック下の入場制限にもかかわらず13,000人が訪れたという<sup>1</sup>。同ギャラリーで2021年9月中旬から11月末まで開催された *Rita Keegan: Somewhere Between There and Here* 展と連動して、本書は制作された。

本書には、写真や絵画、コピー・アートやコラージュといったRita Keeganの作品、ブラック・アーティストやブラック女性アーティストに関連する展覧会やギャラリーのリーフレット、ポスター、フライヤー、カタログ、招待状、プログラム、さらにはKeeganが関与したグループ活動に関する記事など、彼女が長年収集し保管してきた作品と資料が収録されている。資料収集の意図についてKeeganは次のように述べる。「展覧会がどれほどすばらしくても、その痕跡（エフェメラ）がなければ、それはなかったことにされてしまいます。紙切れがなければ、歴史から抹消されるのは簡単なことなのです」<sup>2</sup>。

「家族のアルバムを使って物語をつくり、彼らの内面を捉え視覚化しようとする」(p. 19) Keeganの手法に衝撃を覚え共感したというBarby Asanteとの対談では、次のように応答している。

私はそうした視覚イメージのなかで育ちました。でもそれ以外は学校や教科書、雑誌から得たもので、そこには私が写っていませんでした。あのビクトリア時代の写真に私は写っていませんでした。でも家に帰れば、100年分の写真があるわけで、美術書で見ていたものは自分の経験を反映したものではありません。だから家族の写真を使うことで、これが私であり、これが私たちなのだと感じたのです。(p. 19)

本書はアート作品集であり論集でもある。Keeganを含む13人—アーキヴィスト、アーティスト、キュレーター、研究者、作家ら—が本書に寄稿したエッセイや論考は、『黒く光る鏡』と題した本書においてなにを映しだそうとしたのだろうか。

### 作品の外部世界を映しだす

アーティストでもアート研究者でもない私に作品評は手に余る。またKeeganによる幼少期からの自伝およびアート活動から日常生活までの記録を批評するには、Rita Keegan Archiveの豊富な資料の渉獵と分析が欠かせない。だからとって、そうしたことを口実に本書を避けるわけにはいかない。本書に掲載される一つひとつの作品と各論考が、作品の外側にある世界つまり私を取り巻く現実世界を映しだしているからだ。

最近のメディア報道はKeeganについて、「忘れられた先駆者 (Forgotten Pioneer)」あるいは「隠された人物 (Hidden Figure)」と表現する<sup>3</sup>。ブラックの、ブラック女性の、ブラック女性アーティストの、ブラック・アート運動の歴史と現在を忘却し隠蔽する歴史的社会的な権力構造、そのなかで生きる自身の位置、書き手はそれらを決して表現しない。記憶も記録もせず一過性の消費主義と市場主義にさらす今日の視覚表現と歴史記述の問題性を疑問視することもしない。

これらメディア報道が露呈するような表現の権力関係と他者化の政治学を映しだすことに本書は見事に成功している。各寄稿者がKeeganとの出会いと協働から自己省察するプロセスを丁寧に記述しているからだ。なかでも私が注目するのは、Hiroko Hagiwara (萩原弘子、以下「萩原」と表記する)の論文である。「英国アーティストの作品を日本に紹介する際には、大英帝国の歴史と不可分な文脈で彼らの作品が成立することをつまびらかにしてきた」(p. 88)。こう述べる萩原の意図には重要な含意がある。まず日本のインテリゲンチヤが抱えてきた問題を次のように提示する。

リベラル派知識人は、「西洋以外の他者」の立場に立ってヨーロッパ中心主義に対するポストコロニアル批評に邁進する一方で、旧植民者としての責任と共犯性に関する議論をないがしろにしてきた。(p. 88)

このように「西洋以外の他者」であり「植民地主義帝国」であるという二面性を日本の歴史に位置づける萩原の追究は、ここで終わらない。西洋からの輸入学問に頼る西洋外の他者でありながら、アジア諸国に対する帝国であるという二面性に向き合わないの

が、日本ならではの学術界の問題である。萩原はそれをよく知っている。萩原と同じくブラック女性アーティストでない「よそ者」の読者に、傍観や忘却に逃げるのではなく、みずからの二面性に直面することを求める。密度の濃い労作に読者が緊張感を覚えるのは、一次史料の博搜と精査を踏まえた萩原による手堅い論証が歴史記述の歪みを映しだすからだ。

## 「視覚化」と「可視化」

歴史的社会的権力関係に対する読者の関心を呼び起こすのにKeeganが差し出す事例は、エプロン布である (pp. 19-20, pp. 69-71)。エプロンの視覚表現をつうじて彼女は、作り手であるブラック女性の創造性と精神性、ブラック女性による連帯コミュニティの位置を示す。彼女が試みるのは、人種化、ジェンダー化、階級化された家庭領域におけるブラック女性の身体、家族、ケア、労働、縫製技術、織物記録の価値転換である。

美術史の領域に、生産領域に、さらには公共の場にエプロン表象を移行させることで、Keeganは家庭と仕事、生活とアート、その間にある階層化、人種化、ジェンダー化の区分を攪乱する。Keeganは言う。「物が額に入れられ、ガラス面で仕切られると、どう見られ、どう序列が変わるかを私は知っています。それは違うものになるのです」(p. 20)。

エプロンを視覚作品にすることなんてかつてはなかった。Keeganはそれをやってのけた。アートの世界で表現するに値するものでなかったのを、額装し視覚アート作品にして呈示するとエプロンの見え方も違って来る。生活世界とアート世界、女性の日常的使用品、家事用品の位置づけなど常は見えないものが作品にしてみると見える。

「可視化」と「視覚化」は英語で言えばどちらもvisualizationであるが、日本語それぞれの意味はかなり違っている。「可視化」は「不可視化」を克服して実現されることであり、社会の諸局面、諸相における排除、疎外、抹殺などの克服の問題を議論する際に使われる概念である。それに対して「視覚化」は、視覚図像による表現の有無、方法に言及する概念だ。

可視化と不可視化は非対称な共存関係にある。不可視化されてきたものを可視化するには、視覚図像表現という視覚化とその共有が不可欠である。それには収集、保管が必須だ。そうしてこそ有形無形の抵抗運動に関する歴史理解が可能となると本書は教えてくれる。視覚表現による可視化の実現、可視化による不可視化の克服をめざし展開してきたアート運動の重要な一郭を伝える独創的な本書に学ぶべきことは多い。

## 枠組みをつくる

「枠組みがないと、『自分は何もしていない』という感覚が定着してしまう」(p. 36) とはKeeganの言だ。認識できる枠組みがない場合、または枠組みに適合しない場合、様々な帰結が生じる。誤認されることによる苦痛、露出が少ないことによる強制的な不可視化、見る者に訴えかけることによる燃え尽きや疲労などだ。ゆえにKeeganは、アーティスト主導のギャラリー、アーティスト・インデックス、スライド・ライブラリーといった枠組みを開発し、スペースをつくり、インフラを整備し、技術を駆使してきた。それらによる可視化の重要性と可能性を痛いほどわかっていたKeeganがキャリアを費やして実現したのは、枠組みの構築である。

自己の基盤となる歴史について学ぶ機会を剥奪され追究しつづける人びとに向けて、自身のナラティブから歴史を描写する。人が歴史を認識するには他者との経験共有が不可欠であることを、言葉や声を獲得する前からKeeganは経験上知っていた。世代を越えた女たちの生が日常にあったからだ。カリブ諸島とブラック・カナダ人のルーツをもつ中産階級出身の女性であるKeeganは、複雑なアイデンティティを単純化することもステロタイプ化することもしない。消去を拒否し存在を確認するために、自己と家族のアーカイヴを近代の物語のなかに位置づけ、西洋近代を問い直す。「自分を歴史のなかに複製する」(p. 39)。彼女が定義づけるアーカイヴ戦略だ。広範なブラック・アーツ・コミュニティが包摂する貴重なパーソナル・ナラティブを私たちに伝えるだけでなく、人種とジェンダー、表象の政治といった課題を強調するアート運動の政治性を手放さない。本書に通じる戦略である。

## 綿密な調査と精確な分析、深遠な論理が映しだすもの

展覧会の図録でありアーカイヴの紹介である本書は、論集としても重要である。諸論考のなかでも萩原が寄稿の“Recollections as a Constant Observer from Another Fallen Empire”(pp. 86-89)が、短いながら重要な役割を果たしている。1988年以降、萩原は継続的に訪英しその研究成果を発表しつづけてきた。彼女の寄稿文が本書で重要な位置を占めるのは、彼女が表明する立場性である。

リーズのちにはロンドンに調査研究のための拠点を置いた萩原は、英国の戦後移民に関する歴史と文化政治学に関する文献資料を渉猟し、ブラック・アート／アーティストに関連したあらゆる資料を集め、アーティストや作家との交流を深めていく。本書への寄稿依頼に応答した萩原の存在と努力は本書で異彩を放つ。本書に対しては、非ヨーロッパ社会からの考察によりブラック・アート運動を立体的に映しだすことに成功し、

日本の読者に対しては、私たちが容易に知り得なかったブラック・アートの全貌に非ヨーロッパ社会からアクセスする回路を拓いた。萩原によってはすでに多くの研究成果が日本語で私たちの手元に届けられており、本書にはそのなかから4冊の著書が紹介されている。

Keeganとの交流の契機となった『この胸の嵐—英国ブラック女性アーティストは語る』（現代企画室、1990年）は30年以上前の出版物だが、Keeganの思想と活動、その先駆性と貢献を理解するためにKeegan編の本書と併せて今こそ読まれるべき一書である。萩原の慧眼とインタビュー力は、現在に通じるブラック女性アーティストの哲学を遺憾なく引き出している。

20年の時を経て読まれつづけている名著『ブラック—人種と視線をめぐる闘争』（毎日新聞社、2002年）については、明敏な書評が近年も発表されている<sup>4</sup>。日本の読者がKeegan編の本書を読み解くうえで前提すべき特に重要な指摘は次であろう。

日本の帝国主義と植民地主義の歴史は、現代の日本社会および朝鮮、中国、日本の外交関係に影響を及ぼしている。朝鮮人と中国人に対する国や民族の違いに基づく社会的排除や文化的偏見は、日本では人種主義とはみなされない。日本では人種とスキン・カラーを同一視することが疑われないため、人種主義の問題性は日本社会には関係がない。それを打破したいというのが、『ブラック』を執筆する動機の一つであった。(p. 88)

萩原は評者のインタビュー<sup>5</sup>で、racismを「人種差別」と訳すことの問題を指摘した。曖昧なものでしかない「人種」を決定的なものと前提したうえで、なに事にも「人種」を優先させて判断を下す社会的制度とイデオロギー体系がracismであるという。萩原はこの語に「人種主義」の訳語をあてる。racismに由来する個々人の言動や心根がracial discriminationで、この訳語を「人種差別」としている。「人種」の社会構築性、歴史に由来する「人種」間の権力関係についての考察を踏まえての訳語だろう。しかし日本ではracismを体系的、制度的と捉えることは一般的でなく、racismとracial discriminationを区別せず、どちらにも「人種差別」の訳語があてられる。翻訳問題にとどまらない根源的な問題を指摘しながら、「人種」概念の歴史の変遷を丹念に論じたのが『ブラック』である。

### 非当事者性が映しだす研究深化の可能性

言説の権力関係、正統なる西洋近代、表現の外にある歴史的社会的文脈、人種と文化をめぐる政治学、周縁化と他者化のポリティクス、帝国主義と植民地主義、歴史記述の際に生じる忘却、ディシプリンとしての美術史といった重要問題に通底する論を、萩原は論文や講演等多様な媒体で積極的に発信してきた。学術面および社会面できわめて大きい波及効果を生むに至った英国での30年以上にわたる綿密な現地調査と精確な資料分析、そこから導き出される論理は、『展覧会の政治学と「ブラック・アート」言説—1980年代英国「ブラック・アート」運動の研究』（すずさわ書店、近刊）に結実する。100以上のブラック・アート展を分析した著者の結論によれば、数多開催された展覧会が美術史に関する新しい言説を生み出すことはなく、したがって美術史は正統なる学問という考え方を揺るがすこともなかったというもののだそうだ。その衝撃的な結論の理由が、どうやら「展覧会の政治学」にあるらしい。萩原の考察の仔細はその本の刊行を待つしかない。西洋の文化的ヘゲモニーが世界各地に及ぼす影響を探究する、という決意を示して萩原は本書寄稿文を結ぶ。萩原に対する他の寄稿者と読者の期待は大きいものと思う。

上記3冊に『美術史を解きはなつ』（時事通信社、1994年）を加えた研究の歩みをふりかえる寄稿文は、ブラック・アート運動の研究史でもある。Black Art Movementという用語が使われはじめた1980年代から定期的に「大英帝国」と「もう一つの墮ちた帝国」である日本を往来してきた萩原にしか書けない歴史である。創造的な知的生産と視覚化により正統なる美術史のナラティブを解体しようと試みるブラック女性アーティストたちの歴史的現場に、萩原は1980年代以降立ち会いつづけた。アーティストが集う場に通っては彼らの議論に耳を傾け、研究資料の提供を受ける関係を構築してきた。日本に欧米のアーカイブズ学が本格導入されたのは1980年代半ばである<sup>6</sup>。萩原はすでにこの頃から自力で情報を蓄積するアーカイヴを構築している。

当事者性および当事者の主体性や自律性を貫き通すブラック・アート運動を主導してきたKeeganは、アーカイヴの始動に際し日本にいる萩原に声をかけた。記念出版となる本書に寄稿した13人のリストのなかに、ブラックでもアーティストでもない、つまりブラック・アート運動の「当事者」ではない日本の研究者である萩原が名を連ねていることは、その運動をつくった「当事者」たちの歴史から考えて異例と言うほかない。萩原による1980年代からの貢献について本書に記述する寄稿者もいる（p. 25, 28）。『この胸の嵐』はKeeganの展覧会に陳列されもした<sup>7</sup>。萩原が分析した上記ブラック・アート展に参加したアーティストは450人にのぼるという事実を考えれば、そのなかにはいない



萩原への寄稿依頼は不思議にも見える。おそらく英国にとっての「よそ者」という定位からブラック・アート運動と伴走した萩原の研究の積み重ねを評価しての依頼だったのであろう。帝国主義、植民地主義、ヨーロッパ中心主義、人種主義、視覚表現、美術史、学問の正統性、アーカイブズ学、歴史記述といった問題群の研究を深化発展させる可能性を萩原の寄稿文は示唆している。Keeganが、萩原が、次になにを映しだすか、彼女たちの実践と研究に注目しつづけたい。

### [注]

- 1 Ego Ahaiwe Sowinski and Dominique Z. Barron. “Black Feminist Archival Continuums: A Digital Remix of the Rita Keegan Archive (Project).” *Hyperallergic*, 10 March 2021. <https://hyperallergic.com/621723/archival-continuums-a-digital-remix-of-the-rita-keegan-archive-project/> (最終閲覧日 2022年1月1日)
- 2 The Art Newspaper. “Art and social media: do museums need memes?” *The Week in Art Podcast*, 26 June 2020. <https://www.theartnewspaper.com/2020/06/26/art-and-social-media-do-museums-need-memes> (最終閲覧日 2022年1月1日)
- 3 Ego Ahaiwe Sowinski. “Curating with Care: A reflection on working with the Rita Keegan Archive Project.” *Rita Keegan Archive Project*, 23 November 2021. <https://ritakeeganarchiveproject.com/2021/11/23/curating-with-care-a-reflection-on-working-with-the-rita-keegan-archive-project/> (最終閲覧日 2022年1月1日)
- 4 美術・舞台芸術批評を専門とする高嶋慈によるartscapeレビュー参照。[https://artscape.jp/report/review/10164096\\_1735.html](https://artscape.jp/report/review/10164096_1735.html) (最終閲覧日 2022年1月1日)
- 5 2021年9月6日、Zoomにて実施。
- 6 安澤秀一・大藤修・安藤正人「座談会 日本におけるアーカイブズ学の発展」『アーカイブズ学研究』27, 2017年, 34頁。
- 7 Rita Keegan Archive (Project) のウェブサイト参照。<https://www.southlondongallery.org/exhibitions/rita-keegan-archive-display/> (最終閲覧日 2022年1月1日)